

「感謝」

—中学生の子から親への言の葉—



うさぎのかまぼこ

あっ、心の中で小さく声をあげる私。

素早くお弁当のふたで中身をかくし、すぐ食べる。

また入っていたうさぎのかまぼこ。

「友達に笑われるから絶対にやめてよ」と私。

「別にいいじゃない」と母。

そうしてまた、あのかまぼこは弁当箱の中へ。

今日は入っていないよね、とふたの間からのぞく。

いつしかそれが私の楽しみになっていた。

恥ずかしいけれど、なんだかちよっぴり嬉しい。

そして、いつもぷつと笑いたくなる。

そういえば、私が元気がないと、必ず母は入れてくれたっけ。

私が一瞬でも笑ってくれるようにと願って、母はこっそり入れる。

母の優しさあふれる、私へのプレゼント。

私の元気の源は、これからも私だけの特別かまぼこ。



父さん

父さんは、いつも自分勝手。自分たちで小麦粉からパンを作りたいと言い出して、勝手にパン焼き機を買ってきた。夜になっていきなりパンを作ると言い出した。パン焼き機に材料を入れるだけという簡単なもので、私が分量を量っているのに、適当でいいなんて言い出した。バターの量は適当なのに、入れる順番だけはうるさかった。でも、パンはおいしかった。そこがくやしい。

父さんはいつも、自分中心。自分のトイレは長いくせに、私が入っていると、五秒おきにトイレの戸をたたく。

でも、父さんは、時々やさしい。お小遣いがないうちに、本を買ってくれたり、お金をくれたりする。そこだけはあるがとう。でも、そんな父さんに、よく似ていると私は言われる。



お母さん

「ハンカチとティッシュは持った？」

この言葉は、私が小学校に入学した時から、今まで、ずっとお母さんが言っている言葉。

私は中学生になってからも、こんなことを言うお母さんのことが、うるさいなあと感じたり、何歳だと思っているのかと考えたりしていた。

そして、この前聞いてみた。

「いつまで、そんなこと言うの？」と。するとお母さんは、

「いつまでも言うよ。ずっと。ずっと。」と答えた。

恥ずかしいような、嬉しいような気持ちになった。そして私は、この言葉をできるだけたくさん聞きたいと思った。いつかはきっと、このことを、二人で笑って話せる日が来ると思うから。



父の手紙

お父さんが忙しかった頃、ぼくが朝起きたら、食卓の上に手書きで書かれたメモ用紙が二つ置いてあった。それは毎日、ぼくが朝起きると仕事に行き、ぼくが寝た頃に帰ってくるお父さんからの、ぼくと妹に宛てた手紙だった。その手紙には、こう綴られていた。

「○○へ。毎日会話もできなくてごめんな。一緒にキャッチボールできなくてごめんな。もうすぐしたらお父さんの仕事も忙しくなくなると思うから、また一緒にキャッチボールやろうな。」とあった。メモ用紙に書かれた手紙の内容は、たったの三文だった。でも、それは明らかに夜遅く帰ってきて、疲れていたけれども、ぼくに申し訳ない気持ち表れている文字だった。ぼくは、そんな手紙を読みながら、目にうつすらと涙が浮かんだ。ぼくは、仕事で忙しいお父さんに手紙を宛てた。



超能力

ぼくの母は、恐ろしいほどの超能力を持っています。ぼくが遊んでいたのを隠していると、すぐに見破られます。とても迷惑な能力だと、その時思いました。

ある日、塾から帰った時、何故かドアの前に母がいました。ずっと待っていたのかと聞くと、今、外に出たと言いました。これは便利な超能力だと思いました。僕もその能力を手に入れたくて母に聞いてみました。しかし、母はいずれ、手に入れるものだと言いました。

僕はその答えに納得がいかず、友達にその話をしてみました。その話に驚くであろうと思った友達は、驚きませんでした。何故驚かなかったのかを聞くと、友達も同じだったみたいです。だから僕は、この超能力は特別な能力などではなく、親ならだれでも持っている能力だということが分かりました。この能力で、僕を見守ってくださいね。



二人で頑張っ

いつも一人で育ててくれて、ありがとう。仕事で大変なのに、私の部活の行事を毎回見に来てくれるよね。でも、私は全然手伝いもしないし、何一つ、お母さんの役に立てない。本当にごめんなさい。お父さんと別れた日。今でも、すっかり覚えているよ。でも思い出したら泣きそうになるんだ。お父さんとの思い出話をしたら、お母さんが泣きそうになる。だから思い出話は、しないことにした。お母さんの辛そうな顔見たら、私も辛くなるからさ。でも、お父さんは、忘れないよ。友達のお父さんの話を聞くと、すごく羨ましいよ。でも、お父さんとの思い出は、お母さんと私の胸にしまって、二人で頑張っ

て生きていこうね。これからは、私がお母さんを支えられるよ。うな存在になるからね。普段は、恥ずかしくて言えないけど、いつもありがとう。



大切なこと

私はとっても幸せだ。優しい家族と動物に囲まれて。勉強だって教えてくれる。だけど時々ブワツと心が暗くなる。自分がとってもイヤになる。姉をやめたいと思う。そんな日、一冊のノートが棚から落ちた。そっと開くと母が書いた日記だった。一九九六年……。私が生まれた日。一ページ一ページ開くと早く春になってほしいという題の詩が書かれ、その日の気持ちがぎっしり書いてあった。「苦しいけどポポがいるから頑張れる。」「ポポに早く会いたい。」私はペタリと座り込んだ。ジワーツと目が熱い。父のこともたくさん書いてある。私は忘れていたんだ。大切なこと。もしこの父と母が出会ってなかったら……。今の幸せは皆のおかげ。ありがとう。今ここにいること。ありがとう。自分を好きでいよう。私でいよう。かか、とと、これからもよろしくね。



魔法のオムライス

私は、おばあちゃんの作るオムライスが大好きです。私に悲しいことや辛いことがあると、祖母は何も言わずに作ってくれます。

祖母の作るオムライスは、卵がほんのり甘く、ふわふわで、食べるととても幸せな気持ちになります。私が幼い頃から食べているそのオムライスは、まるで祖母の人柄を表しているかのように温かくて、美味しいのです。オムライスを食べると今まで悩んでいたことも吹き飛んでしまいます。だから祖母の作るオムライスは、きっと魔法のオムライスなのだ、私は思います。

いつか私も、祖母のように自分の作ったオムライスで誰かを幸せにしてあげられたらいいなと思います。今度は一緒に、魔法のオムライスをつくらうね、おばあちゃん。



ごめんね、お父さん

「お父さんも頑張るから、鹿児島で好きなことを一生懸命しなさい。」
と僕に言ってくれたお父さん。

父が兵庫に転勤して、三か月が過ぎた。転勤が決まったとき、家族はもめた。「お父さんについて行こう」と言う母と、「鹿児島に残りたい」という僕。なかなか結論が出せず、時間だけが過ぎた。

一年前に鹿児島に引っ越してきて、一人も友達がいなくて、僕は教室の片隅にぽつんと一人。あの頃の僕には、二度と戻りたくなかった。

お父さん、一人で行かせて「ごめんね。」

お父さんのひと言のおかげで、僕は今の生活を楽しんでいるよ。なかなか会えなくて寂しいけれど……。今度、帰ってきたらキャッチボールしようね。

